

散歩に利用された道からみた快適な歩行環境に関する考察*

A Study on Walking Environment from Analyses of those for Meanders*

木村一裕**・清水浩志郎***・土田祐子****

Kazuhiro KIMURA**, Koshiro SHIMIZU*** and Yuko TSUCHIDA****

1. はじめに

近年、道路環境整備においてゆとりやうおいのある空間、また高齢者や障害者といった交通弱者が気軽に外出できるような空間整備など身近な生活道の質的充実が求められている。この背景には、だれでもが気軽に“歩くこと”ができる歩行空間整備の必要性と、車社会の到来によりふだん歩くことがなくなったことで、余暇活動としての歩行の重要性が増しているためと思われる。

本研究では、快適な歩行環境整備において、散歩に利用されている道の特性と利用者の評価構造を明らかにすることによって、活道の質的向上について考察することを目的としている。

これまでも散歩についてはいくつかの研究が行われている。坂本ら¹⁾は、歩道の人間らしい利用の最たるものとして、日常生活の「散歩」に着目し、散歩の要素と散歩道のデザインコンセプトをまとめている。また吉川ら²⁾は今後の都市づくりにおける人々の都市体験の必要性の観点から大都市の住宅街地における「散歩」「街歩き」の実態を把握し、それを触発するための都市づくり課題を考察している。

散歩道については、阿彦ら³⁾が散歩の目的・時間などから散歩行動の実態を把握し、現在の散歩道に対する評価及び要望を明らかにすることにより快適な歩行環境について考察を行っている。橋口ら⁴⁾は散策行動に関して、利用頻度の高い散策路の条件や景観の特徴について明らかにし、その利用空間の特性とその際に好まれる景観についての研究を行って

いる。

このように散歩に着目した研究では、散歩の実態や散歩道に対する要望・評価、道の特性に関するものが多く、評価構造に関する研究は見あたらない。

2. 研究の概要

本研究では散歩に利用されている道の空間評価の明確化と、散歩選好意識をもたすイメージの把握をすることにより生活道の質について検討を行うため道の映像を用いたアンケート調査を行った。調査対象は、平成5年度に行われた散歩行動に関するアンケート調査⁴⁾の結果を基に秋田市内で、散歩に利用されている道20ヶ所を選定した。また映像は、ビデオカメラを高さ約1.45mに構え、日頃歩いている感覚で歩行者の視点から撮影したものをを用いた。被験者は大学生62名(男性39名、女性23名)である。

調査項目は、選好意識と道の評価に大別される。選好意識については散歩道として、また生活道としての2つの選好意識について分析した。道の評価では形容詞対を用いて映像から受けるイメージを回答してもらった。次いで評価値を基に数量化理論Ⅲ類による分析を行い、イメージにより散歩道を類型化し、各類型について、その選好意識、評価構造について考察した。

3. 散歩道、生活道としての選好

はじめに「散歩してみたい」あるいは「生活道として利用してみたい」という道について、選好意識の60%を基準として4つのグループに分類した。その結果と評価に用いた道を写真-1に示している。

この分類によると、散歩してみたい道(①、②)としては遊歩道として整備されている道やふだんあ

* キーワーズ: 交通弱者対策、交通安全、交通流

** 正員、工博、秋田大学鉱山学部土木環境工学科

*** 正員、工博、秋田大学鉱山学部土木環境工学科
(秋田市手形学園町1-1、TEL 0188-33-5261、
FAX 0188-37-0407)

**** 正員、東京都多摩市整備本部
(多摩市山王下1-415、TEL 0423-89-2173)

まり見かけられないような道が多く、2つのタイプが見受けられる。一つはある程度の緑の多さや空の広さが必要とされており、大まかに緑に覆われている空間であり、もう一つは空の広い空間である。また生活道として利用してみたい道〔1〕、〔3〕は、ふだん利用している住宅地や商店街などの道で、ゆったりとして安全な歩行空間が確保されていることが必要と思われる。逆に散歩道としても生活道としても利用したいと思わない道〔4〕についてみると、歩行空間が確保されていない、緑が少ない、といった点が選好意識に影響しているものと思われる。

4. 散歩に利用されている道の類型化

(1) 散歩道のイメージ

散歩に利用されている道のイメージを把握するため、SD法の評価値により因子分析を行った。

ここでは散歩道と生活道のどちらの選好意識も高かった道として、①けやき通りをとり上げ、その分析結果を表-1に示している。第1因子をみると「ゆったり」「ほっとする」「やわらかい」の因子負荷量の値が高く、これを『安堵感』と解釈した。因子の寄与率は51.2%と高い割合を示している。また、第2因子では「洒落た」「新鮮な」などの値が高くみられるため、『快活性』と解釈した。他の道についても同様の分析を行った。

(2) 散歩道の類型化

道をイメージにより類型化するため、SD法の評価値を基に数量化理論Ⅲ類による分析を行った。カテゴリープロットより、横軸には「やわらかい-かたい」「ゆったり-きびきび」「暖かい-冷たい」「ほっとする-どきどきする」など、①けやき通りの分析と同様の形容詞対がみられ、これを“安堵感

	散歩したいと思う		散歩したいと思わない	
生活道として利用したい	①  ① けやき通り	②  ② 駅前憩いの場	③  ⑫ 手形山	⑬  ⑬ 南通り
	③  ③ 太平川沿い	④  ④ 御所野	⑭  ⑭ 近藤堰越	⑮  ⑮ 広面高田
生活道として利用したいと思わない	⑤  ⑤ 日吉坂	⑥  ⑥ 山王遊歩道	④  ⑯ 仁井田	⑰  ⑰ 寺町
	⑦  ⑦ 高清水	⑧  ⑧ 新奥の細道(自然道)	⑱  ⑱ 新奥の細道(住職)	⑲  ⑲ 蛇野
	⑨  ⑨ 新屋排水路	⑩  ⑩ セリオン	⑩  ⑩ 草生津川沿い	⑳  ⑳ 通町

写真-1 選好意識による分類

表-1 因子負荷量

評価因子		因子負荷量	
形容詞対		因子1	因子2
⑥ きびきび	-ゆったり	-0.777	-0.108
⑭ ぼっとする	-どきっとする	0.771	0.103
⑫ やわらかい	-かたい	0.733	0.087
⑩ くつろいだ	-かじこまった	0.728	-0.115
⑧ にぎやかな	-静かな	-0.688	-0.108
⑬ 古風な	-近代的な	0.632	-0.094
④ 冷たい	-暖かい	-0.502	0.509
⑤ 洒落た	-素朴な	-0.250	0.772
⑨ 新鮮な	-ありふれた	0.061	0.545
③ 浪漫的な	-現実的な	0.418	0.499
⑮ 豪快な	-繊細な	-0.387	-0.455
② 統一感のある	-変化に富んだ	-0.207	0.186
① 平面的な	-立体的な	0.005	-0.137
⑯ 不思議な	-明快な	0.096	-0.069
⑦ 囲まれた	-開かれた	-0.412	-0.020
① 雄大な	-こじんまり	0.170	-0.011
寄与率 (%)		51.2 %	22.0 %

軸」と解釈した。また縦軸には「雄大な-こじんまり」「浪漫的な-現実的な」「新鮮な-ありふれた」「洒落た-素朴な」といった形容詞対がみられ、ここではこれを「非日常性軸」と解釈した。次にこの空間にサンプルプロットを行い、図-1のようなクラスターを抽出した。この図中の番号は、写真-1に対応している。

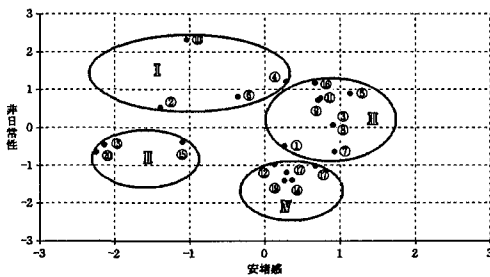


図-1 サンプルプロット

この図の縦軸には「雄大な-こじんまり」「浪漫的な-現実的な」「新鮮な-ありふれた」「洒落た-素朴な」といった形容詞対がみられ、ここではこれを「非日常性軸」と解釈した。横軸には「やわらかい-かたい」「ゆったり-きびきび」「暖かい-冷たい」「ぼっとする-どきっとする」といった形容詞対がみられ、これを「安堵感軸」と解釈した。

次に、クラスター別の特徴とその道名を表-2に示す。クラスターIには、非日常性のイメージが強く、これは特徴からみるとIは遊歩道であり、カラーブロックや自然的な舗装がされていることが一つの要因と考えられる。IIは店舗や車通りの多さから、安堵感の弱さが出ていられると考えられる。またIIIは自

然的な道の緑の多さが安堵感の強さを、IVは住宅という生活感が非日常性の弱さをもたらしていると思われる。

表-2 クラスターとその特徴

クラスター	特徴	場所名
I: 安堵感(負) 非日常性(正)	遊歩道	⑩セリオン、⑫駅前懸いの場 ⑬山王遊歩道、⑭御所野
II: 安堵感(負) 非日常性(負)	店のある道	③南通り、②通町、⑤広面高田
III: 安堵感(正) 非日常性(正)	自然的な道	⑥仁井田、⑤日吉坂、①けやき通り ③太平川沿い、⑨新屋排水路、⑦高清水 ①草生津川沿い、⑧新奥の細道(註2)
IV: 安堵感(正) 非日常性(負)	住宅地の道	⑨手形山、⑧新奥の細道(註2) ④近藤塚越、⑧蛇野、①寺町

5. 散歩道の評価構造

(1)各クラスターの評価因子の抽出

それぞれの散歩道について、SD法の評価値による因子分析をから抽出された因子を表-3に、また表-1には4にクラスター別にまとめた因子の解釈を示す。クラスターIIIでは第1因子にすべて安堵感がみられる。

表-3 抽出された因子と散歩道因子

因子	抽出された散歩道
(1) 安堵感	ほとんどの道にみられる
(2) 快活性	整備されている道に多い (①②④⑥⑭⑯⑳)
(3) 明快さ	カラーブロック舗装されている道 (②⑭⑯)
(4) 開放性	まわりに空を遮るものがない道 (④⑥⑭)
(5) 浪漫的	緑によって覆われている道 (③⑥⑦⑧⑨)
(6) 情緒性	道沿いに古い建物がみられる道 (⑦⑳)
(7) 郷愁性	なつかしさを感じるような住宅地の道 (③⑫⑬)
(8) 新奇性	あまり見かけることのない目新しい道 (④⑨⑩)
(9) 日常性	いつもと同じでつろげる道 (①)
(10) 人工的	造形的につくられた住宅地域の道 (④)

表-4 因子の解釈

散歩道	第1因子	第2因子	第3因子
I	⑫駅前懸いの場	安堵感(負)	快活性
	④御所野	人工的	新奇性
	⑬山王遊歩道	緑・緑の	快活性
	⑩セリオン	開放性	新奇性
II	③南通り	安堵感	快活性
	⑤広面高田	安堵感(負)	快活性
	②通町	安堵感	情緒性
III	①けやき通り	安堵感	快活性
	③太平川沿い	安堵感	浪漫的
	⑤日吉坂	安堵感	
	⑦高清水	安堵感	明快さ(負)
	⑧新奥の細道(註2)	安堵感	開放性(負)
	⑨新屋排水路	安堵感	新奇性
	①草生津川沿い	安堵感	日常性
	⑥仁井田	安堵感	開放性
IV	⑨手形山	安堵感	郷愁性
	④近藤塚越	快活性	開放性
	①寺町	安堵感	情緒性
	⑧新奥の細道(註2)	安堵感	浪漫的
⑧蛇野	郷愁性	安堵感	浪漫的

また安堵感以外の因子についてみると、散歩選好意識の一番低いクラスターⅡには新奇性や浪漫的といった因子はみられない。

(3) 選好意識と道のイメージ

因子分析の結果より、散歩に利用されている道には安堵感を含む道が多くみられる。そこで安堵感と散歩してみたいという選好意識の関係を明らかにするために①けやき通りの第1因子（安堵感軸）、第2因子（快活性軸）により構成される座標軸上において、散歩選好意識別に個体をプロットしたものを図-2に示している。この図から安堵感の因子得点の低い人に、むしろ散歩道としての選好意識が高いということがいえる。

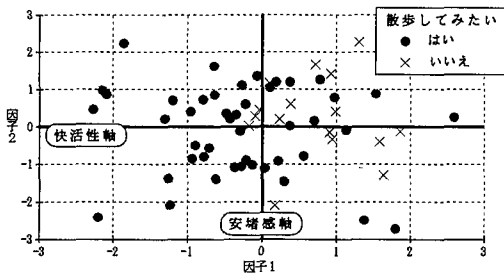


図-2 個体プロット -①けやき通り-

そこで非日常性といったイメージがどのように道の選好意識と関わっているのかをみるため、数量化理論Ⅲ類を用いて類型化したクラスターごとに選好意識を人数の割合によりまとめた。それを図-3に示す。

この図より生活道の意識にはあまり差はみられないが、散歩選好意識ではⅠとⅢのクラスターで高く、逆にⅡとⅣで低いことがわかる。特にⅡの散歩選好意識では14.0%とかなり低い値を示している。

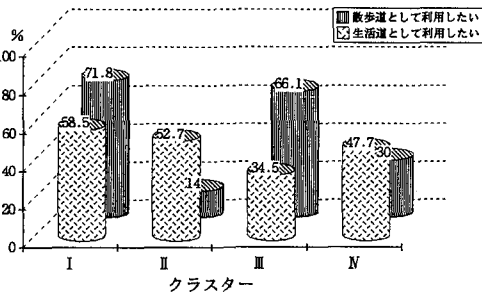


図-3 クラスター別選好意識

これより道のイメージと散歩選好意識には何らかの関連性があると思われる。また散歩に利用されている道においては、安堵感を基本的構造であると考ええると、散歩選好意識に影響をおよぼす要因として非日常的なイメージがあげられる。このことから「安堵感」は歩行空間の基本的な機能ではあるが、散歩として利用するにはそれだけでは十分ではなく、他の因子による影響の大きいことがうかがえる。

しかし、因子分析の個体プロットでもみたように分類①、②より散歩道としての選好意識には「安堵感」だけでなく、その他の因子が大きく関与していると考えられる。安堵感以外の因子についてみると道としての新奇性、浪漫的など、非日常的な機能に対する評価との関わりが見出された。

6. まとめ

散歩に利用されている道の評価構造には「安堵感」が基礎にあるとおもわれる。しかし「歩きたい」という意識はそれだけで決められていないことが分かった。生活道の質としては、安全に歩けるという歩行空間の確保は必須であるが、安堵感や機能だけでなく、「歩きたい」と思わせる魅力がである。本研究ではその魅力に共通する要因として非日常性を抽出した。今後は、高齢者世代など広い世代についての分析や、イメージと歩行空間の空間特性等との関連性について分析したいと考えている。

参考文献

- 1) 坂本紘二・外井哲志・花田克彦：「散歩」に着目した歩行空間のあり方について、第48回土木学会学術講演概要集, pp. 456~457, 1993.
- 2) 吉川仁・中村昌広：「散歩」と「街歩き」による都市体験に着目した都市づくりに関する基礎的研究—杉並区民の街歩きから—, 第24回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 499~504, 1989.
- 3) 阿彦勝博・清水浩志郎・木村一裕：散歩行動からみた道路の環境整備に関する考察, 土木学会東北支部技術研究発表会, pp. 490~491, 1993
- 4) 橋口徳郎・青木陽二：筑波研究学園都市の散策路評価に関する研究, 第21回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 433~438, 1986.